

【テキスト中に現れる記号について】

〈〉：ルビ

(例) 中洲なかつ

：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 深川清住町きよすみちやう

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(例) 「#ここから2字下げ」

中洲なかつの河岸かしにわたくしの旧友が病院を開いていたことは、既にその頃の『中央公論』に連載した雑筆中にこれを記述した。病院はその後箱崎のち川にかかっている土洲橋どしゅうばしのほとりに引移ったが、中洲を去ること遠くはないので、わたくしは今もって折々診察を受けに行った帰道には、いつものように清洲橋きよすばしをわたって深川ふかがわの町々を歩み、或時は日の暮れかかるのに驚き、いそいで電車に乗ることもある。多年坂ばかりの山の手に家いえする身には、時たま浅草川の流を見ると、何ということなく川を渡って見たくなるのである。雨の降りそうな日には川筋の眺めのかすみわたる面白さに、散策の興はかえって盛さかんになる。

清洲橋という鉄橋が中洲から深川清住町の岸へとかけられたのは、たしか昭和三年の春である。この橋には今だに乗合自動車の外、電車も通らず、人通りもまたさして激しくはない。そのみならず河の流れが丁度この橋のかかっているあたりを中心にして、ゆるやかに西南の方へと曲っているところから、橋の中ほどに佇立むと、南の方には永代橋、北の方には新大橋の横わっている川筋の眺望が、一目に見渡される。西の方、中洲の岸を顧みれば、箱崎川の入口が見え、東の方、深川の岸を望むと、遙か川しもには油堀の口にかかった下の橋と、近く仙台堀にかかった上の橋が見え、また上手には万年橋が小名木川の川口にかかっている。これら兩岸の運河にはさまざまな運送船が輻輳しているので、市中川筋の眺望の中では、最も活気を帯び、また最も変化に富んだものである。

或日わたくしはいつもの如く中洲の岸から清洲橋を渡りかけた時、向に見える万年橋のほとりには、かつて芭蕉庵の古址と、榎木稻荷の社とが残っていたが、震災後はどうなったであろうと、ふと思出すがまま、これを尋ねて見たことがあった。

清洲橋をわたった南側には、浅野セメントの製造場が依然として震災の後もむかしに変わらず、かの恐しい建物と煙突とを聳かしているが、これとは反対の方向に歩みを運ぶと、窓のない平い倉庫の立ちつづく間に、一条の小道が曲り込んでいて、洋服に草履をはいた番人が巻煙草を吸いながら歩いている外には殆ど人通りがなく、屋根にあつまる鳩の声が俄に耳につく。

この静な道を行くこと一、二町、すぐさま万年橋をわたると、河岸の北側には大川へ突き出たところまで、同じような平たい倉庫と、貧しげな人家が立ちならび、川の眺望を遮断しているので、狭苦しい道はいよ

いよせまくなつたように思われてくる。わたくしはこの湫路の傍に芭蕉庵の址は神社となつて保存せられ、榎木稻荷の祠はその筋向いに新しい石の華表をそびやかしているのを見て、東京の生活はいかにいそがしくなつても、まだまだ伝統的な好事家の跡を絶つまでには至らないのかと、むしる意外な思いをなした。

華表の前の小道を迂回して大川の岸に沿い、乗合汽船発着処のあるあたりから、また道の行くがままに歩いて行くと、六間堀にかかった猿子橋という木造の汚い橋に出る。この橋の上に杖を停めて見ると、亜鉛葺の汚い二階建の人家が、両岸から濁水をさしばさみ、その窓々から襤褸きれを翻しながら幾町となく立ちつづいている。その間に勾配の急な木造の小橋がいくつとなくかかっている光景は、昭和の今日に至つても、明治のむかしとさして変りがない。かくの如き昔ながらの汚い光景は、わたくしをして、二十年前亡友A氏と共にしばしばこのあたりの古寺を訪うた頃の事やら、それよりまた更に十年のむかし嘶家の弟子となつて、このあたりの寄席、常盤亭の高座に上つた時の事などを、歴々として思い起させるのである。

六間堀と呼ばれた溝渠は、万年橋のほとりから真直に北の方本所豎川に通じている。その途中から支流は東の方に向い、弥勒寺の堀外を流れ、富川町や東元町の陋巷を横ぎつて、再び小名木川の本流に合している。下谷の三味線堀が埋立てられた後、市内の堀割の中でこの六間堀ほど暗惨にして不潔な川はあるまい。わが亡友A氏は明治四十二年頃から三、四年の間、この六間堀に沿うた東森下町の裏長屋に住んでいたことがあった。

東森下町には今でも長慶寺という禅寺がある。震災前、境内には芭蕉翁の句碑と、巨賊日本左衛門の墓があつたので人に知られていた。その

頃には電車通からも横町の突当りに立っていた楼門が見えた。この寺の墓地と六間堀の裏河岸との間に、平家建の長屋が秩序なく建てられていて、でこぼこした歩みにくい路地が縦横に通じていた。長屋の人たちはこの処を大久保長屋、また湯灌場大久保と呼び、路地の中のやや広い道を、馬の背新道と呼んでいた。道の中央が高く、家に接した両側が低くなっていた事から、馬の背に譬えたので。歩き馴れぬものはきまつて足駄の横鼻緒を切ってしまった。維新前は五千石を領した旗本大久保豊後守の屋敷があつた処で、六間堀に面した東裏には明治の末頃にも崩れかかった武家長屋がそのまま残っていた。またその辺から堀向の林町三丁目の方へ架っていた小橋を大久保橋と称えていた。

これらの事はその頃A氏の語つたところであるが、その後わたくしは武鑑を調べて、嘉永三年頃に大久保豊後守忠恕という人が幕府の大目附になつていた事を知つた。明治八、九年頃までの東京地図には、江戸時代の地図と変りなく、この処に大久保氏の屋敷のあつた事がしるされている。

かつてわたくしが初山庭後君と共に月刊雑誌『文明』なるものを編輯していた時、A氏は深川夜鳥という別号を署して、大久保長屋の事をかいた文を寄せられた。今その一節を見るに、

「#ここから2字下げ」

湯灌場大久保の屋敷跡。何故湯灌場大久保と言うのか。それは長慶寺の湯灌場と大久保の屋敷と鄰接している所から起つた名である。露地を入れて右側の五軒長屋の二軒目、そこが阿久の家で、即ち私の寄寓する家である。阿久はもと下谷の芸者で、廃めてから私の世話になつて二年の後、型ばかりの式を行つて内縁の妻となつたのである。右隣りが電話のポタンを拵える職人、左隣がブリキ職。ブリキ職の女房は亭主の稼ぎが薄い

ので、煙突掃除だの、エンヤラコに出たりする。それで五人の子持である。お腹がふくれると、口が殖える将来を案じて、出来ることなら流産ながれてしまえば可よいがと不養生のありたけをして、板の間にじかに坐つたり、出水でみずの時、股のあたりまである泥水の中を歩き廻つたりしたにもかかわらず、くりくりと太つた丈夫な男の児が生れた。

私の家は二畳に四畳半の二間きりである。四畳半には長火鉢ながひばち、箆たんすが二棹さおと机とが置いてある。それで、阿久と、お袋と、阿久の姉と四人住んでいるのである。その家へある日私の友達を十人ばかり招いて酒宴を催したのである。

先まづず縁側えんがわに呉座こざを敷いた。四畳半へは毛布を敷いた。そして真中に食卓を据すえた。長火鉢は台所へ運んで、お袋と姉とは台所へ退却した。そして境界よじどに葭戸よしどを立てた。二畳に阿久がいて、お銚子ししだの煮物だのを運んだ。(略)さて当日の模様をざつと書いて見ると、酒の良いのを二升、そら豆しおゆでの塩茹しおゆでに胡瓜きゅうりの香物かうものを酒さかなの肴さかなに、干瓢かんぴょうの代りに山葵わさびを入れた海苔のりま巻まきを出した。菓子折を注文して、それを長屋の軒別に配つた。兄弟分が御世話になりますからとの口上を述べに何某しかつめが鹿爪しかつめらしい顔で長屋を廻つたりした。すると長屋一同から返礼に、大皿に寿司を遣よこした。唐紙とうしを買つて来て寄せ書きをやる。阿久の三味線で何某おちうどが落人おちうどを語り、阿久は清心せいしんを語つた。銘々の隠芸かくしげいも出て十一時まで大騒ぎに騒いだ。時は明治四十年六月九日。

「#ここで字下げ終わり」

この時代には電車の中で職人が新聞をよむような事もなかつたので、社会主義の宣伝はまだ深川の裏長屋には達していなかつた。竹格子たけこうしの窓には朝顔の鉢が置いてあつたり、風鈴ふうりんの吊されたところもあつたほどで、向三軒両鄰むこうさんけんりょうどうり、長屋の人たちはいずれも東京の場末に生れ育つて、昔な



がらの迷信と宿習との世界に安じていたものばかり。洋服をきて髻など生したものはお廻りさんでなければ、救世軍のような、全く階級を異にし、また言語風俗をも異にした人たちだと思込んでいた。

わたくしは夜烏子がこの湯灌場大久保の裏長屋に潜みかくれて、交りを文壇にもまた世間にも求めず、超然として独りその好む所の俳諧の道に遊んでいたのを見て、江戸固有の俳人氣質を伝承した真の俳人として心から尊敬していたのである。子は初め漢文を修め、そのまさに帝国大学に入ろうとした年、病を得て学業を廃したが、数年の後、明治三十五年頃から学生の受験案内や講義録などを出版する書店に雇われ、二十円足らずの給料を得て、十年一日の如く出版物の校正をしていたのである。俳句のみならず文章にも巧みであつたが、人に勧められても一たびも文を售ろうとした事がなかつた。同じ店に雇われていたものの中で、初め夜烏子について俳句のつくり方を学び、数年にして忽門戸を張り、俳句雑誌を刊行するようになった人があつたが、夜烏子はこれを見て唯一笑するばかりで、その人から句を請われる時は快くこれを与えながら、更に報酬を受けなかつた。

夜烏子は山の手の町に居住している人たちが、意義なき体面に累わされ、虚名のために齷齪しているのに比して、裏長屋に棲息している貧民の生活が遙に廉潔で、また自由である事をよるこび、病余失意の一生をここに隠してしまつたのである。或日一家を携えて、場末の小芝居を見に行く日記の一節を見ると、夜烏子の人生観とまた併せてその時代の風俗とを窺うことができる。

「#ここから2字下げ」

明治四十四年二月五日。今日は深川座へ芝居を見に行くので、店から早帰りをする。製本屋のお神さんと阿久とを先に出懸けさせて、私は三十

分ばかりして後から先になるように電車に乗った。すると靈岸町の手前で、田舎丸出しの十八、九の色の蒼い娘が、突然小間物店を拡げて、避ける間もなく、私の外出着の一張羅へ真正面に浴せ懸けた。私は詮すべを失った。娘の兄らしい兵隊は無言で、親爺らしい百姓が頻に詫びた。娘は俯向いてこそそと降りた。癩に障って忌々しいが叱り飛す張合もない。災難だと諦めた。乗り合わせた他の連中は頻に私に同情して、娘とその伴の図々しい間拔な態度を罵った。飛沫を受けたので、眉を擡めながら膝を拭いている婆さんや、足袋の先を汚された職人もいたが、一番迷惑したのは私であつた。黒江町で電車を下りると、二人に逢つた。今これこれだと阿久に話すと、人に歩かせて、自分は楽をしたものだから、その罰だと笑いながらも、汚れた羽織の仕末には困つた顔をした。幸いとお神さんの亭主の妹の家が八幡様の前だといつので、そこへ行って羽織だけ摘み洗いをしてもらうことにして、その間寒さを堪えて公園の中で待つていた。芝居へ入つて前の方の平土間へ陣取る。出方は新次郎と言つて、阿久の懇意な男であつた。一番目は「酒井の太鼓」で、栄升の左衛門、雷蔵の善三郎と家康、蝶昇の茶坊主と馬場、高麗三郎の鳥居、芝三松の梅ヶ枝などが重立つたものであつた。道具の汚いのと、役者の絶句と、演芸中に舞台裏で大道具の釘を打つ音が台辞を邪魔するとなぞは、他では余り見受けない景物である。寒い芝居小屋だ。それに土間で小児の泣く声と、立ち歩くのを叱る出方の尖り声とが耳障りになる。中幕の河庄では、芝三松の小春、雷蔵の治兵衛、高麗三郎の孫右衛門、栄升の太兵衛に蝶昇の善六。二番目は「河内山」で蝶昇が勤めた。雷蔵の松江侯と三千歳、高麗三郎の直侍などで、清元の出語りは若い女で、これは馬鹿に拙い。延久代という名取名を貰っている阿久は一々節廻しを貶した。捕物の場で打出し。お神さんの持つて来た幸寿司で何も

取らず、会計は祝儀を合せて二円二十三銭也。芝居の前でお神さんに別れて帰りに阿久と二人で蕎麦屋へ入った。歩いて東森下町の家まで帰った時が恰度夜の十二時。

「#ここで字下げ終わり」

かつて深川座のあった処は、震災後道路が一変しているので、今は活動館のあるあたりか、あるいは公設市場のあるあたりであるのか、たまに散歩するわたくしには判然しない。

むかしの黒江橋は今の黒龜橋のあるあたりであろう。即ちむかし閻魔堂橋のあったあたりである。しかし今は寺院の堂宇も皆新しくなったのと、交通のあまりに繁激となったため、このあたりの町には、さして政策の興をひくべきものもなく、また人をして追憶に耽らせる余裕をも与えない。かつて明治座の役者たちと共に、電車の心行寺に鶴屋南北の墓を掃ったことや、そこから程遠からぬ油堀の下流に、三角屋敷の址を尋ね歩いたことも、思えば十余年のむかしとなった。(三角屋敷は邸宅の址ではない。堀割の水に囲まれた町の一部が三角形をなしているので、その名を得たのである。)

今日の深川は西は大川の岸から、東は砂町の境に至るまで、一木一草もない。焼跡の空地に生えた雑草を除けば、目に映ずる青いものは一つもない。震災後に開かれた一直線の広い道路と、むかしから流れている幾筋の運河とが、際限なき焦土の上に建てられた臨時の建築物と仮小屋とのごみごみした間を縦横に貫き走っている処が、即ち深川だといえ、それで事は尽きてしまうのである。

災後、新に開かれたセメント敷の大道は、黒龜橋から冬木町を貫き、仙台堀に沿って走る福砂通と称するもの。また清洲橋から東に向い、小名木川と並行して中川を渡る清砂通と称するもの。この二条の新道が深



川の町を西から東へと走っている。また南北に通ずる新道にして電車の通らないものが三筋ある。これらの新道はそのいずれかを歩いても、道幅が広く、両側の人家は低く小さく、処々に広漠たる空地がある。青空ばかりが限りなく望まれるが、目に入るものは浮雲の外には、遠くに架っている釣橋の鉄骨と瓦斯タンクばかりで、鳶や鳥の飛ぶ影さえもなく、遠い工場の響が鈍く、風の音のように聞える。昼中でも道行く人は途絶えがちで、たまたま走り過る乗合自動車には女車掌が眠そうな顔をして腰をかけている。わたくしは夕焼の雲を見たり、明月を賞したり、あるいはまた黙想に沈みながら漫步するには、これほど好い道は他にない事を知った。それ以来下町へ用足しに出た帰りには、きまつて深川の町はずれから砂町の新道路を歩くのである。

歩きながら或日ふと思出したのは、ギヨーム・アポリネールの『坐せる女』と題する小説である。この小説の中に、かつてシャンパンユの平和なる田園に生れて巴里の美術家となつた一青年が、爆裂弾のために全村尽く破滅したその故郷に遊び、むかしの静な村落が戦後一変して物質的文明の利器を集めた一新市街になつているのを目撃し、悲愁の情と共にまた一縷の希望を感じ、時勢につれて審美の觀念の変動し行くことを述べた深刻な一章がある。

災後、東京の都市は忽ち復興して、その外観は一変した。セメントの新道路を逍遙して新しき時代の深川を見る時、おくれ走せながら、わたくしもまた旧時代の審美観から蝉脱すべき時の来た事を悟らなければならぬような心持もするのである。

木場の町にはむかしのままの堀割が残っているが、西洋文字の符号をつけた亜米利加松の山積せられたのを見ては、今日誰かこの処を、「伏見に似たり桃の花」というものがある。モーターボートの響を耳にし

ては、「橋台に菜の花さけり」といわれた渡場わたしばを思い出す人はない。かつて八幡宮の裏手から和倉町わくらまちに臨む油堀のながれには渡場の残っていた事を、わたくしは唯夢のように思返すばかりである。

冬木町の弁天社は新道路の傍かたわらに辛くもその社を留めている。しかし知十翁ちじゅうが、「名月や銭金いはぬ世が恋ひし。」の句碑あることを知っているものが今は幾人あるであろう。(因ちなみにいう。冬木町の名も一時廃せられようとしたが、居住者のこれを惜しんだ事と、考証家島田筑波氏が旧記を調査した小冊子を公刊した事とによつて、纒むすかに改称かわかひの禍わざわいを免れた。)冬木弁天の前を通り過ぎて、広漠たる福砂通ふくさどおりを歩いて行くと、やがて真直に仙台堀に沿うて、大横川おおよこがわの岸に出る。仙台堀と大横川との二流が交叉こうさするあたりには、更にこれらの運河から水を引入れた貯材池がそこ此処こゝにひろがっていて、セメントづくりの新しい橋は大小幾筋となく錯雑さくさつしている。このあたりまで来ると、運河の水もいくらか澄んでいて、荷船にぶねの往来もはげしからず、橋の上を走り過るトラックも少く、水陸いずこを見ても目に入るものは材木と鉄管ばかり。材木の匂を帯びた川風の清涼なことが著しく感じられる。深川もむかし六万坪と称えられたこのあたりまで来ると、案外空気の好い事が感じられるのである。

崎川橋さきかわばしという新しいセメント造りの橋をわたった時、わたくしは向うに見える同じような橋を背景にして、炭のように黒くなった枯樹かれきが二本、少しばかり蘆あしのはえた水際から天を突くばかり聳え立っているのを見た。震災に焼かれた银杏いちようか松の古木であろう。わたくしはこの巨大なる枯樹のあるがために、単調なる運河の眺望が忽ち活気を帯び、彼方かたの空にかすむ工場の建物を背景にして、ここに暗鬱なる新しい時代の画図をつくり成している事を感じた。セメントの橋の上を材木置場の番人かと思われる貧し気な洋服姿の男が、赤児あかこを背負った若い女と寄添いながら歩い

て行く。その蹻音あしおとがその姿と共に、橋の影を浮べた水の面おもてをかすかに渡つて来るかと思うと忽ち遠くの工場から一斉に夕方の汽笛が鳴り出す……。わたくしは何となくシャルパンチエーの好んで作曲するオペラでもきくような心持になることができた。

セメントの大通は大横川を越えた後、更に東の方に走って十間川を横切り砂町すなまちの空地に突き入っている。砂町は深川のはずれのさびしい町と同じく、わたくしが好んで蒹葭けんかの間に寂寞を求めに行くところである。折があつたら砂町の記をつくりたいと思っている。

「#地から2字上げ」甲戌こうしゅう十一月記

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2010年11月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aoz>

ora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。